

やんさノエ

会報

2005 No.4



発行 江差追分会

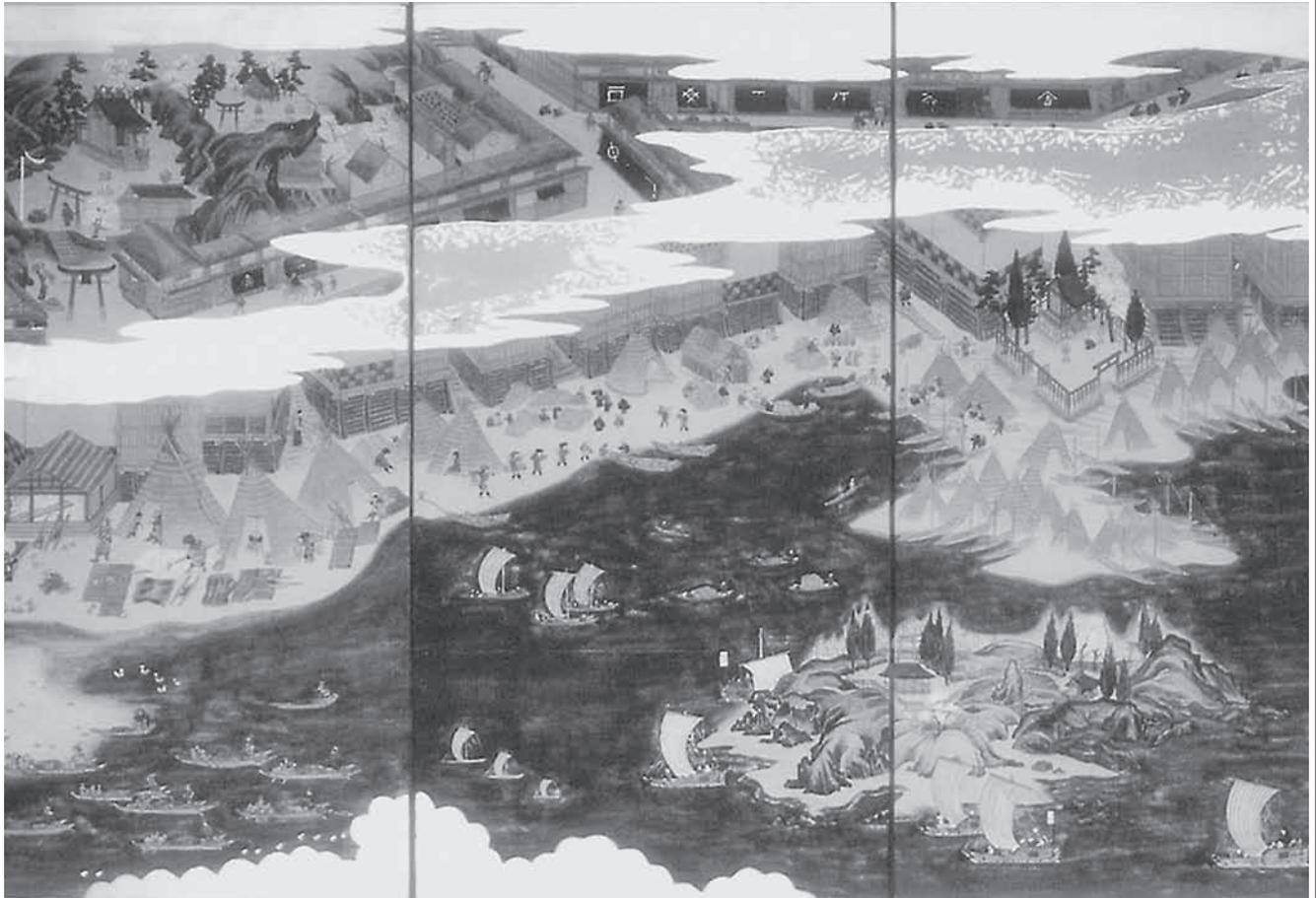
2005.9.1

北海道松山郡江差町中歌町193-3

TEL 01395-2-5555

FAX 01395-2-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>



江差前浜屏風（宝歴年代作）

子供の江差追分……岩渕啓介

江差追分全国大会には楽しみが、ぎっしり詰まっている。なかでも、きわだって鮮やかな彩りを放つのは、子供たちの歌う江差追分である。三、四歳の幼児から小学生、中学生までが大舞台に立って歌う。

子供たちに特有の澄んだ、甲高い、きれいな声で、難しいといわれる江差追分を堂々と歌い上げるのを聴いていると、うっとりする。

ただ単純に、子供が歌っている、しかも、かなり上手に歌っているのが、たまらなく嬉しく思われる。

ドイツ映画『ベルリン・フィルと子どもたち』を見た。若手の気取りのない指揮者で芸術監督のサイモン・ラトルが指揮するベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏する交響曲、ストラビンスキー作曲『春の祭典』に合わせて、二百五十人の子供たちが、モダンダンスを踊る。

ラトルが始めた「教育プロジェクト」のひとつで、まったく経験のない子供たちが六週間の猛特訓により、ベルリン・アリーナの大舞台でオーケストラと共演する。

子供たちが舞台に立って江差追分を歌い、聴き手も満場の子供たち、審査も子供たちが担当する、といった「教育プロジェクト」は有り得ないだろうか、夢想している。

（江差追分会理事）

平成十七年度江差追分会総会

町補助金の削減で積立金充当

事業運営の自立検討委員会設置

平成十七年度江差追分会総会が、四月二十四日江差町文化会館で開催され、新年度の事業計画や収支予算など主な課題が協議された。



平成十七年度予算総額は、三、三三三万九千円で前年度より三三二万円減額の圧縮予算となった。収入では町補助金三四二万円減額され、それを積立金三六〇万円を取らずして補い、従来の事業を継続する厳しい内容となった。

追分会は江差町が経営を担い、町が補助金を充当してきたが、最近自治体の再編制度によって町財政が急速に行きづまり、補助金政策の見直しで大幅な減額となった。

本年予算の主な収入としては組合員会費七七万円、補助金六〇〇万円、積立金取らずし三六〇万円などである。

会費は前年度値上げ（一、五〇〇円から二、〇〇〇円）したが、値上げ増額は二〇〇万円弱で、補助金の減を積立金で補っている。しかし積立金残も三四〇万円に落ち込んで期待で

きない。

追分会の組織も会員の高齢化で会員が減少し、会費の増額も難しい。

今後の運営を抜本的に見直ししなければならず、追分会の自立を目標に検討委員会を設け、方針を決めることになった。

◇事業の主な計画

- 一、江差追分全国大会
- 二、地区選抜大会
- 三、格付審査や師匠研修会の育成
- 四、愛知万博、中小企業大会の追分派遣
- 五、追分会報「ヤンサノエ」発行



追分セミナー 格付審査会場

師匠など指導資格者が認定される

本年度江差追分会資格認定審査会の認定を受けて、次の指導者が認定された。

名誉師匠

下川部 久治（厚沢部支部）

師匠

後藤 栄華（幌別支部）

準師匠

井口 道雄（東京第一支部）

石塚 千文（静岡第一支部）

田中 君枝（札幌白石支部）

西 弘之（札幌北支部）

松本 寿美子（旭川西支部）

松谷 忠（函館中央支部）

講師

稲荷山 治（南空知支部）

榎本 弥惣七（網走声友会支部）

加賀谷 義郎（室蘭白鳥会支部）

桂川 潤次郎（ポート神奈川支部）

桑名 靖生（日立桑の実会支部）

小松 晃（伊達湖声会支部）

永井 春吉（川崎支部）

山田 實（伊達湖声会支部）

準講師

末武 忠雄（江友会支部）

本間 久代（かもめ会支部）

松木 秀一（東京成嶋会支部）

第二十一期江差追分セミナーに熱中

厳冬二月、追分の世界に浸って、参加者一六一名本州から六十一名

日本海から吹きつける「タバ風」に磨かれてきた江差追分を、その最もきびしい厳冬二月に特訓しようとはじめた「江差追分セミナー」が、二月四週にわたって行われた。

二月三日から二十六日まで四週行われた本年セミナーの受講者は総数一六一名追分受講の希望は更新の傾向にある。本州から来る人も多く、六十一名に及び関西、関東、北陸方面が多い。

追分の勘どころをじっくりと学ぶには、三日間にわたって本場の師匠が特訓するセミナーが人気で、第一期から毎年参加している熱中派も少なくない。セミナーには会員以外でも自由に参加できるので本州から会員外五名、初参加者も二十五名と追分を唄いたいと希望する者が多い。

セミナー受講の最終日(三日目)には習得の進み具合を確かめる格付審査も受けられる。本年の格付審査は一四五名のうち昇級は四十二名である。格付昇級者は次のとおり。

- 二級
 - 島田 真智子 (幌別支部)
 - 寺島 絵里佳 (水堀愛好会)
 - 岡田 辰雄 (宝優会支部)
 - 成田 誠 (札幌南支部)
 - 佐々木 トキエ (東京練馬支部)
- 三級秀
 - 石ケ守 拓忠 (函館支部)
 - 佐竹 真奈 (苫小牧銀星会支部)
 - 押野 朱美 (苫小牧銀星会支部)
 - 押野 里架 (苫小牧銀星会支部)
 - 宮園 真壽美 (札幌北支部)
 - 倉知 セツ子 (追分塾支部)

三級 片岡 千ヨ (早来町清志会支部)

四級秀 長澤 和 (札幌南支部)

井上 奈菜 (網走声友会支部)

山形 ナカ子 (深川支部)

内田 勝三 (深川支部)

中野 忍 (とやま支部)

佐々木 鶴江 (北見中央支部)

鈴木 孝子 (かもめ会支部)

小野 美香 (追分塾支部)

飯澤 セツ子 (札幌真昇支部)

長田 紀美雄 (大阪佐知支部)

佐藤 里子 (伊達湖声会支部)

齊藤 由紀子 (深川支部)

武田 静子 (ポート神奈川支部)

岡崎 重夫 (室蘭白鳥会支部)

真後 政明 (かもめ会支部)

西元 令子 (早来町清志会支部)

高元 瞭子 (石川県中央支部)

五級秀 末永 栄一 (室蘭白鳥会支部)

橋本 厚子 (百万石榮春会支部)

大貫 弘史 (兵庫県姫路支部)

大川 邦彦 (一般参加)

玉井 浩美 (千歳支部)

坂本 茂子 (深川支部)

山田 都子 (深川支部)

諸岡 勤 (東京友楽会支部)

石井 義房 (日立桑の実会支部)

六級 今井 行久 (登別こだま会支部)

伊藤 泰充 (愛知三河支部)

細川 辰男 (大和菊華会支部)

奥村 久治 (大和菊華会支部)

江差追分会役員の変更

平成十七年度総会で役員任期満了で選挙が行われ、大部分の役員は再選された。退任された役員は別記のとおり四名。

◇新役員

顧問 三隈 治雄

会長 濱谷 一治

副会長 青坂 満

常任理事 坂本 勇

地区部門理事 江差追分会事務局長

浅沼 春義

佐々木 基晴

熊野 正宏

小野 常光

吉田 保

田村 重光

伊藤 良三

田中 光男

佐々木 東雲

杉山 貞悦

坂野 正義

藤島 芳郎

柳谷 良逸

福田 継男

芸能部門理事

阿部 真光

大原 勇一郎

近江 八声

房田 勝芳

浅沼 和子

小笠原 次郎

渋谷 義幸

高清水 勲

杉山 由夫

市戸 脩

奥野 和芳

吉田 翠山

山本 ナツ子

長谷川 富夫

館 和夫

松村 隆

岩渕 啓介

高田 裕

亀田 栄

吉田 博

千場 芳巳

下川部 久治

中西 輝子

浅井 清

浅沼 和子

学芸部門理事

監査役

浅沼 和子

監査役

浅沼 和子

理事

浅沼 和子

◇退任役員

監査役

浅沼 和子

監査役

浅沼 和子

江差追分で海外遠征公演

江差南高校追分部の活躍

江差南高等学校追分部支部長 柳谷 良逸

江差南高校追分部の歴史は、昭和五十七年四月に江差高校から専門学科が分離独立したときから始まります。地域の伝統芸能を学び継承することです。発足しました。

昭和五十八年には、NHKテレビ



全国高校総合文化祭出場 会場：北九州市戸畑市民会館

「ひるのプレゼント」でグラウンドの真ん中に演舞台を置き紅白の幕を張りめぐらし、歌手の山本譲二さんと金田たつえさんが追分部の生徒と江差追分を一緒に唄い、本校女生徒全員（二六〇名）で華麗な追分踊りを披露しました。そういうことがあつて追分部が活気づいてきました。

平成元年には、日本テレビ「日本名作の旅」で女優の真屋順子さんと一緒に出演したり、平成二年には、HBCテレビ「レポート6」で、かもめ島の上で唄っている風景や芸術教室で練習している場面などが放映されました。その後、平成十五年にはNHK、STV、HBCと何回も取材を受け、放映されました。

昭和六十三年度より、北海道高等学校文化連盟

の郷土部門に新たに郷土芸能部門が設けられてから、十七年連続道南支部の大会を勝ち進み全道大会に参加しました。さらに北海道代表として全国大会にも五回出場しています。

平成八年には、『アジア青少年国際文化交流事業』の推薦を受け、八日間中国を訪れ、黒竜江省人民政府やハルビン市教育委員会等を表敬訪問、ハルビン市の北方劇場では、江差追分踊り等を披露し国際舞台にまで活動を広げたのです。

平成十一年には、俳優の西田敏行さんが追分部の練習風景を取材、全国放映されています。地域文化の追分に取組み活動している高校は全国にもないでしょう。

平成十三年には、読売新聞社主催の「二〇〇〇北のくらし大賞」奨励賞を受賞。その時の審査員の講評「郷土芸能を支えるヤングパワー」を新聞から抜粋します。

「北の暮らしに根付いているものの一つに郷土芸能がある。それを地元の若い力も支えている。学校選びの理由に『追分部に入部したいから』という生徒もいる。ボランティア活動や国際交流も積極的に進めている。

なんともうれしい話だ。親身な指導を行っている上級生、そんな十七歳もいることだろう」
(札幌テレビ放送アナウンス部長 木村洋二氏)

このほかにも、いろいろなイベントに出演したり、老人ホーム慰問なども経験しました。しかし、江差南高校も来年三月で閉校です。したがって、江差南高校追分部支部も返上しなければなりません。郷土の文化を誇りに、追分部の活動が継続されることを切望しております。支部設置より七年間、多くの方々に大変お世話になりました。



北海道と黒竜江省友好提携10周年記念公演出演 ハルビン市北方劇場

越後瞽女こせの生活

館 和夫

追分節が諸国に伝播し、流行するに当たって、ゴゼと呼ばれる盲目の女旅芸人達が、大きな役割を果たしたことはよく知られている。とくに信州の追分節が越後追分（別名松前、または松前節）に転化して行く過程で、越後のゴゼの果たした役割は大きかったといえる。

歴史的に見るとゴゼという呼び名は、古い時代の女性の尊称であった「御前」に由来し、室町の頃までは貴人の前で小唄を歌い、鼓を打つなどしてわずかに露命をつないでいた女たちを指す。近世の初めに至って三味線が普及してくると、彼女たちの暮らしも幾分ましになったと思われるが、それでも大方の女遊芸人の生活は、貧しく惨めなものだったであろうことは想像に難くない。



門付けをする越後のゴゼ達（昭和30年代：市川信夫氏提供）

ゴゼは、関ヶ原合戦の前に徳川家康に召されて「勝鬨節」という東軍にとつて縁起のよい唄を聞かせ、戦勝に貢献したという伝承がある。そのせいか江戸時代を通じて各地にゴゼ屋敷を与えられるなど、お上の庇護を受けていた。また、格式張った「瞽女縁起」「瞽女式目」などという古文書も三河や駿府、武州、その他甲信越の各地に遺されている。中山太郎氏の名著「日本盲人史」所載の駿河の国の例を見ると、ゴゼは、盲目の身として生まれた嵯峨天皇の第四皇女相模の宮を元祖と仰ぎ、加茂の明神を守り神とし、諸芸を所管する家、およびその所在・流派、修行の年限、階級等を定め、規則に違反した場合の罰則などを記している。また、ゴゼの修行と世人の賑給ないし合力は

嵯峨天皇の定めであると強調し、信心の対象として下加茂明神のほか如意輪観音（妙音菩薩）、妙音弁財天をあげ、不信心者はたちどころに神仏の罰が当たると警告している。もとより史料的价值のある文書ではなく、皇室を初めとする貴人とゴゼ社



高田ゴゼの故 杉本シズコさん

会の所縁を述べ、永続的な公の保護を期待すると共に、社会的身分の向上と、規律の強化、収入の増加などを願って造り上げた文書と思われる。長い冬を、煙の立ち込める炉端に籠りがちな暮らしを強いられる越後地方では、古来、眼疾に苦しむ者が多かった。そのような風土のもと、長岡、高田など数箇所の地に多くのゴゼ屋敷が置かれ、不幸にして盲目に生れ付いたり、幼くして眼疾のため明を失った少女たちは生業を求めて、それぞれの屋敷の親方の下に弟子入りするか、養子縁組という形で入籍し、

多年にわたる地の滲むような修行の末、それぞれ一人前のゴゼに育っていったのである。貧農の家庭から口減らしのため手引きとしてゴゼ屋敷に迎えられた少女も多かったという。ゴゼ仲間の掟はきびしく、男と関係を持つこと、無断で屋敷から逃亡すること、春秋の総会や妙音講など仲間が必ず出席すべき行事や会合に遅れるなどは、とりわけ厳しく罰せられた。古くは、芸の覚えの悪い子に

対するゴゼ仕置といわれる体罰が行われたようであるが、長じては修行の年限を削られる「年落し」（後輩に先を越される）や、「所払い」、あるいは不義の子を産んで「追放」の憂き目にあうことなどもある。

仲間の援助を受けられなくなったゴゼの末路は哀れなもので、幸せな結婚を夢見ながら男に裏切られて窮死したゴゼも多かったという。古い時代、長岡あたりのゴゼの一部が北海道にも渡ってきたといわれるが、それらの中には、おそらく離れゴゼも含まれていたことであろう。

その他、古い時代には雪の中で行き倒れになったり、飢饉の年でも合力を願って歩かなければならない自らの境遇に耐えられず、連れ立って自死した年若いゴゼの話、旅先で腹痛を起こして病臥していながら、死期を悟ったのか青年たちの宴席に起き出してきて、「松前」を立派に一曲唄って翌日亡くなったカトウという年若い美声のゴゼの話など、ゴゼにまつわる哀話は尽きない。

封建の世から戦争の世へ、そして寂しく消滅する昭和の中期まで、時代のはざままで、精一杯運命と闘った、近世以降、約三百年間の、かよわい女達の魂の叫びが、確かに今日の越後追分とその延長線上にある江差追分の中にも熱く息づいているように思われてならない。（学芸部理事）

懐古・SPレコードを聞きながら(四)

江差追分を愛した平野源三郎師：高田 裕

江差の隣り町・厚沢部あつさぶの下川部しもかわべ吉蔵

(天保十一年生、明治四二年没)は縁あって、美声で追分上手と評判の江差芸妓・平野リカ(天保十年生、大正三年没)と結婚する。このご夫婦は子宝に恵まれずリカの遠縁にあたる木古内きこないの平野源七の五男・源三郎を養子に迎えることにする。

当時十四歳であった源三郎は、頭がよくて、気持のやさしい少年。父となる吉蔵は自分がしていた呉服衣類の商いを教え、母となるリカは得意の追分を聞かせる一家水入らずの生活であった。さらに、追分に興味をいだいた源三郎は、花街新地の取締り役であった小榎イクに教えを乞

うことにする。

ここまでは、明治四五年に上京し、そのめざましい活躍で関東一円に追分ブームを起こした平野源三郎(明治二年十月二日生、大正七年四月没)の少年時代の話である。

彼が江差で暮らすようになった明治十六年頃は、それなりのニシン漁があり、繁栄を維持していたが、明治三三年になってそのニシンも凶漁となり、本州からの商人は引き揚げ、残された人々は奥場所に出稼ぎをしたり、奉公に出たりする。

この頃の江差追分といえば、地元では浜小屋節、新地節(別名・旦那節)、詰木石節ずみいし、その他、寺小屋、五



初期の名人 平野源三郎師

勝手節など様々な追分があったのだが、先の町外に流出した者たちが喧伝けんでんし、声価を高めることになる。皮肉なことに地元の追分熱もあがり、世間体を気にしたわけではな

を一本化しようという話を持ちあがる。これが現在の七声・七節・二声上げ、という正調江差追分に繋がる。そのとき、平野源三郎は四〇歳、その中心人物の一人であった。彼は亡くなった父親の意志をつぎ、反物や下着を持って、乙部おとべ・熊石くまishi・北檜山きたひのやま・瀬棚せたなまでの日本海沿岸を一軒づつ丹念に売り歩いた。行商とは、その訪問先の家族構成を頭に入れながら歩き、相手の悩みを聞きながら、ときにはニュースを伝えながら物を売る。なかには、お客の家で不幸があったと聞けば、仏前で読経がわりに追分で供養をし、支払いは後でいいと、掛け売りもした。これこそ、商い冥加みょうかなのだろうが、その人の好きと時代の流れが災いしたのか、彼はその商売に失敗し、つぎに種苗に手を出す。その種苗を入れて歩いた背負い箱を、厚沢部在住の名誉師匠・下川部久治氏(昭和五年生)は覚えていた。ちなみに、厚沢部には十二、三軒の下川部姓があるが、総本家は南部屋といって先の吉蔵と縁つづき。古くから追分が盛んなところで、全国大会では第十八回から二三回まで六年連続の

優勝者を出している土地柄。

さて、江差姥神大神宮の藤枝貞磨と親交のあった当時の札幌区選出の代議士・浅羽靖あさか(号・苗村)は種苗の件で源三郎の相談にのるが、彼の追分ファンとなって明治四五年六月に東京神田のキリスト青年会館で開催された追分節演奏大会に連れて行き、大成功をおさめる。このとき「忍路高島」や「恋の道にも」などをうたって講評を博するが、靖の作詞である「雪にたたかれ」もうたった。それから約一年間、東京に滞在して愛好者に追分を教えたり、レコード吹き込みの活動をしたりする。いい機会なので、彼のレコードをお知らせしておこう。

※追分(忍路高島)／追分(雪にたたかれ) 馬場節(碓井峠)／三下り(波の音) (ニッポノホン、三味線伴奏・駒助) ちなみに、彼の追分レコードはグラモヒル社発行の「珍品レコード」でも紹介されている。で、こうした彼の東京での活躍も病弱のため長つづきせず、江差の上野町に一度戻る。彼は最初の妻と子供は病気で失い、再婚するも反そりが合わず離婚。だが、家

追分全国大会入賞者発表など改善

入賞者の事前発表で進行を短縮

全国大会第三日目の決選会後における入賞発表や表彰授与などの進行を短縮し終了時を早めるため運営方法を一部改善することにした。

九月十八日

(一)12：35～13：15 昼食休憩に前年優勝者のアトラクション発表を行う。

少年・熟年優勝者は本唄

一般優勝者は前・本・後唄踊りつき

◎少年四位～十位・審査員奨励賞入賞発表

(二)17：15 決選会終了舞台整理

◎熟年四位～十位入賞発表

(三)18：00 アトラクション後

◎一般四位～十位入賞発表

少年・熟年・一般とも順位の発表はせず氏名だけ発表して、表彰の事前に舞台控に待機する。

表彰の際、順位を発表、十位から四位まで舞台上で表彰を一括授与する。

四位までの表彰伝達の後、少年、熟年、一般とも三位から一位まで発表して表彰伝達する。

入賞発表から舞台集合、表彰伝達



まで、時間がかかるため、入賞者が会場から離れていることもあり、四位までの入賞者を事前に発表して、表彰授与に待機してもらうことで進行を短縮する処置を改善するもので、表彰終了まで会場から退席することのないよう、協力を呼びかけている。

江差追分会支部設置承認

平成十七年四月二十四日理事会に

おいて次の支部が設置承認された。

菊声会支部 江差町

支部長 菊地 勲 会員数 二〇名

大阪金剛支部 富田林市

支部長 大柳 宣之 会員数 二〇名

脱会支部・会員の高齢化などの事情により次の支部が脱会した。

札幌幌西支部支部長 伊藤 省三

札幌交誼会支部支部長 須藤 誠

栃木県馬頭支部支部長 松浦金四郎

埼玉県草加支部支部長 川俣 信明

石川県百万石支部支部長 水測 外栄

下川部久治上席師匠が引退

江差追分会師匠ならびに厚沢部支部長など追分会の役員として、長年指導運営に尽力されてきた下川部久治さんが、七十五歳の高齢に達したことで、後進に道を譲り、本年三月、追分会の役職を引退された。

下川部さんは、昭和四十七年五月第四代厚沢部支部長に就任されて以来、全国大会で優勝者を支部最多六人を輩出するなど指導力が高く評価された。退任後追分会名誉師匠につかれた。



平成17年2月 追分セミナーで講評指導する下川部上席師匠

督をまもるため父の縁で迎えた養子・勝太郎（教員職）を頼って札幌に行き、そこを拠点に各所で追分を公演し、教室を開き三木如峰や宇田茶山などの弟子を育成する。だが、腺病質なのだろうか、やはり健康状態がすぐれず、満四九歳で追分に一生を捧げた彼の生涯は閉じてしまう。

今回、源三郎が遺してくれた幽婉な追分を先の下川部久治師匠に改めて聞いていただいたが、教え上手とされている師匠のお話のなかにも、端正で気だてのやさしい（追分魂）が脈々と続いている、と感じた。

（学芸部理事）

江差追分会の将来を見据えて

検討委員会を設置

今年の四月二十四日に開催された江差追分会の総会において、江差追分会の自立化や法人化なども視野にいたれた検討委員会の設置が承認されましたが、七月の理事会では、その検討委員会の今後について提案させて頂きました。

その内容は、

- ① 広く意見を徴するため、追分関係者に限らない委員会構成
- ② 委員会で検討する内容
- ③ 今後のスケジュール

などが主なものであり、追分大会までに委員の選任、追分大会終了後から会議を開催していくものとしました。会の設置の背景には、江差追分会を取り巻く状況の変化があります。会員の高齢化、会員数の伸び悩み、加えて追分会への補助等で大きく会に関わってきた江差町の財政状況の逼迫など、環境的には厳しいものがあります。

そうした状況を踏まえ、今後江差追分会が自立・発展していくためには何をしたらいいのか、何が必要な

のかが大きなテーマであり、そのためにも幅広い見地から検討を加えていくものです。

検討委員会では、来年三月中に会長へ報告書を答申する予定であり、その内容については会員の皆様にも報告致します。

事務局体制の変更

七月一日付で、江差町の人事異動が発令され、追分会事務局も職員の間にも一部変更が行われたため、組織的改革も同時に行われたため、組織的改革では、組織間の連携をより密にするため、従前の課を統合したことにより、今まで江差追分課だったものが、産業振興課（農林課、商工観光課、江差追分課の三つを一つにしたもの）に纏められ、職名も江差追分課長が産業振興課の江差追分担当理事と変更になりました。職務内容や勤務地などは変わりません。

新スタッフで江差追分全国大会を迎え、不安もありますが、一生懸命頑張りますのでよろしくお願い致します。

お世話になりました

元 江差追分課長・

山崎 透

(江差町ほか二町学校給食組合所長)

元 江差追分課追分係長

江差追分会事務局次長

森山 弘之

(檜山広域行政組合 地域振興係長)

よろしく申し上げます

新 産業振興課理事

江差追分会事務局長

西谷 和夫

(南部檜山衛生処理組合 場長)

新 産業振興課江差追分係長

江差追分会事務局次長

中川 智

(江差町議会事務局 議事係長)

引き続きよろしく申し上げます

産業振興課江差追分係

江差追分会事務局

澤田 博生

(江差追分課追分係)

江差追分会事務局

竹内 裕子

(江差追分会事務局)

あとがき

□平成十七年度総会で、追分会組織運営の検討委員会設置が提案された。

今まで町補助に依存してきたが、財政事情から従来の運営が難しくなったことから、自立運営の方向を探ろうということである。会員の負担がともなっていくことになるが、先人が長い年月で築きあげた追分文化の本質が崩れることのないように心がけなければならないと思う。

□本年度江差南高校が廃校することになって高校追分部分部が消える。高校生の追分体験という全国的にも注目されたユニークな活動だっただけに惜しい限りです。

□江差追分は、洗練された音楽性が高く、民族音楽の域に達したと位置られました(世界音楽祭シンポジウム)。

地方の民謡ではなくこれほどの追分文化なのだから学校教育の積極的な取組が必要なのではないか。岩淵啓介さんの「子供の江差追分」にそれを感じました。

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 西谷和夫・中川 智

澤田博生